

社会福祉士養成教育の相談援助演習における

ICT 活用の成果と今後の課題

坂本毅啓^{*1}, 佐藤貴之^{*1}, 中原大介^{*2}

^{*1} 北九州市立大学, ^{*2} 福山平成大学

Achievements and Future Issues of ICT Utilization in Social Work Exercises in Social Worker Training Education

Takeharu Sakamoto^{*1}, Takayuki Sato^{*1}, Daisuke Nakahara^{*2}

^{*1} The University of Kitakyushu, ^{*2} Fukuyama Heisei University

A web-based survey was conducted with students who were enrolled in a social work university or a social work correspondence school and who took the online format of the social work exercise between the 2020 and 2021 academic years. While some students said they did not have to travel, others found it difficult to communicate with other learners or between learners and faculty. Considering the learning objectives of the social work practice, it was found that the communication aspect needs to be improved.

キーワード: 福祉専門職教育, 相談援助演習, ICT 活用, コミュニケーションスキル

1. はじめに

2020 年から新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 拡大 (以下, コロナ禍) が始まり, その影響から福祉専門職をはじめ, 医療・看護・保育等の専門職養成教育の現場においては, ICT の活用が求められた. その結果, これら対人援助職の養成であるにも関わらず, 臨床現場や学内において他者と直接関わることなく, 専門的知識を活用した専門的実践力を獲得することが求められた. 特に社会福祉士や精神保健福祉士, 介護福祉士の養成教育における ICT を活用した教育実践研究については, コロナ禍前からいくつかあったものの, 医療・看護等の領域のように取り組まれてきたとは言えなかった⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾.

そういった中, 2020 年と 2021 年には, 日本ソーシャルワーク教育学校連盟が, 社会福祉を学ぶ学生, 福祉養成校 (大学, 短大, 専門学校), 実習指導者に対して全国調査を行った⁽⁴⁾⁽⁵⁾. これらの全校調査の結果, ICT を活用することの教育的有効性が示された. また, 2020 年と 2021 年にかけて実際に ICT を活用した教

育実践を踏まえた研究成果が多数発表されたが, いずれもどのように工夫をしたのか, 学生はどのような意見を持つにいたったのかを明らかにした内容である⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾.

一方で, ICT を活用した場合, 対面と同様以上の教育の質の担保ができていないのかについては, まだはっきりとした結果を得ることができていない. 積み上げられてきている研究成果は臨床現場での実習 (相談援助実習等) と, そのための実習指導 (相談援助実習指導等) を中心とした内容が多いという面もある. これらを踏まえ, 本稿では社会福祉士養成教育における相談援助演習 (学内演習) において ICT を活用した成果と今後の課題について, 相談援助演習で ICT を活用したオンライン形式と対面方式の両方を経験した学習者に対して行ったアンケート結果から考えることにする.

2. 社会福祉士養成教育における相談援助演習の位置づけと教育目標

2.1 社会福祉士養成教育における相談援助演習の位

置づけ

社会福祉士は「社会福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを抵抗する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者（第 47 条において「福祉サービス関係者等」という。）との連絡及び調整その他の援助を行うことを業とする者」（社会福祉士及び介護福祉士法第 2 条）と定められている。福祉事務所や児童相談所のケースワーカー、医療機関における医療ソーシャルワーカー、障害者の就労支援員等の職務として就労している。

社会福祉士を取得するには、厚生労働省が指定する科目を開講する大学（福祉系大学）、もしくは厚生労働省が指定する養成施設（専門学校）があり、通学課程と通信課程がある。

本稿が対象とするのは、2009～2020 年度入学生に適用された旧カリキュラムの学生である。これは調査を行った 2021 年時点で相談援助演習を受講した学生は、旧カリキュラム生であったためである。カリキュラム全体としては 22 科目、計 1200 時間で構成されている。その内、座学となる講義科目は 19 科目、計 780 時間、演習及び実習となる科目は 3 科目、計 420 時間となっている。本稿ではこの内、演習科目となる相談援助演習（150 時間）を対象とする。

2.2 相談援助演習の教育目標

演習とは「理論、方法、技術、価値、諸体系と実践体系との交互連鎖現象を実証する作業」と定義することができる。そしてその目的は「1）実習に向かう準備の段階で、理論や技術・価値を実践に適用することの意義をこの一連の作業を通して十分に理解させ、2）実習体験後に実習で学習したものと理論との橋渡しをするための理論化の作業を可能にすること」にあるとされている⁹⁾。

相談援助演習の教育目標については、厚生労働省によって定められている。それによれば「相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得する

とともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。①総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげること。②個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。」（「大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針」と定められている。

2.3 相談援助演習の教育内容

相談援助演習の教育内容についても、厚生労働省によって定められている。その全体像を示すと自己覚知や基本的コミュニケーション技術の習得、基本的な面接技術の習得、事例に基づく実践的学習を学ぶことになっている。

3. 研究方法

3.1 調査の目的

コロナ禍での相談援助演習において ICT を活用したオンライン方式と対面方式の両方を受講した学生は、オンライン方式にどのようなメリット・デメリットを感じたのかを調査することで、オンライン方式の授業方法は対面方式と同様の教育の質を担保することができたのかを明らかにすることを目的とした調査を行うこととした。

3.2 実施方法と倫理的配慮

調査方法はウェブアンケートフォームを作成して、協力依頼状を授業時間外に配布し、調査の主旨、アンケート回答の有無・内容等が授業評価とは関係が無いこと、及び倫理的配慮について説明をした上で各人の自由意志に基づいて調査への協力を求めた。調査の実施及びデータの取り扱いについては、北九州市立大学における「人を対象とする研究に関するガイドライン」に則った。

3.3 調査の対象

調査対象は、縁故法による恣意的抽出とした。2020 年度は相談援助演習をオンライン方式、2021 年度は対面方式をそれぞれ経験した福祉系大学及び社会福祉士

養成通信課程の専門学校に在籍する学生計 150 名とした。調査期間は福祉系大学が 2021 年 7 月 28 日から 29 日、社会福祉士養成通信課程が 2021 年 8 月 8 日から 9 日にウェブアンケート方式で実施した。回答数は 45、有効回答数は 44 であり、有効回答率は 29.3%であった。

3.4 調査の項目

調査項目は①望ましい授業方法（全日程対面方式、前半対面方式・後半オンライン方式の組み合わせ、前半オンライン方式・後半対面方式の組み合わせ、対面方式とオンライン方式の組み合わせ自由選択方式、全日程オンライン方式）、②オンライン方式のメリットとデメリット（かなりそう思わない、そう思わない、あまりそう思わない、少しそう思う、そう思う、かなりそう思う、6 件法）、③授業への参加方法（自宅から通っている、ホテル等に宿泊）、④ICT スキル（5 点満点自己評価）、⑦オンライン授業での使用端末（パソコン、スマートフォン等）、⑧基本属性（年齢、性別）によって構成した。

3.5 分析方法

ウェブアンケートによって集められたデータについては、PSPP (Ver.1.5.4) 及び Jamovi (ver.2.3.12) を用いて集計・分析を行った。リッカート法の質問項目については主成分分析及び因子分析を行い、その因子得点を使用して、オンライン方式を支持する意見を従属変数とする 2 項ロジスティック回帰分析を行うことで、メリット・デメリット、あるいは回答者の属性がどのような影響を与えるのかを分析することとした。

4. 結果

4.1 回答者属性

回答者の基本属性については、表 1 及び表 2 に示した通りである。社会福祉士養成通信課程は大学卒業以上の社会人学生が基本であるため、平均年齢が高くなっている。ICT スキルの自己評価については 5 段階の中央値 (3) よりも高く、福祉系大学と社会福祉士養成通信課程との間には有意な差が見られなかった。

オンライン授業を受講する際に使用していた端末はノートパソコンが 84%と大半を占めた (図 1)。

表 1 回答者の性別・所属

	属性	度数	%
性別	女性	37	84.10%
	男性	7	15.90%
所属	福祉系大学	24	54.50%
	社会福祉士養成通信課程	20	45.50%

表 2 回答者の年齢・ICT スキル自己評価

	属性	平均値	標準偏差
年齢	全体	33.57	14.1
	福祉系大学	25.58	12.36
	社会福祉士養成通信課程	43.15	9.36
ICT スキル自己評価	全体	3.5	1.09
	福祉系大学	3.58	1.1
	社会福祉士養成通信課程	3.4	1.1

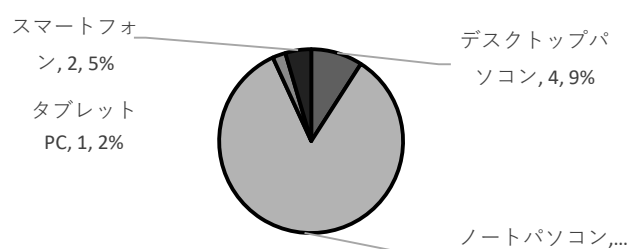


図 1 学習に使用した端末

4.2 ICT 活用に関する意見

4.2.1 望ましい授業方法

相談援助演習に関する望ましい授業方法について、質問の選択肢の内、「前半対面方式・後半オンライン方式の組み合わせ」、「前半オンライン方式・後半対面方式の組み合わせ」、「対面方式とオンライン方式の組み合わせ自由選択方式」の 3 つを「対面方式とオンライン方式の組み合わせ」という回答へと統合した。その結果が図 2 である。全日程方式と組み合わせ方式はほぼ同数であった。全日程オンライン方式については 7% (3 人) と少数であったとは言えるが、全体を見ると全日程対面方式と、一部もしくは全部をオンライン方式を希望する意見は拮抗しているとも言える。

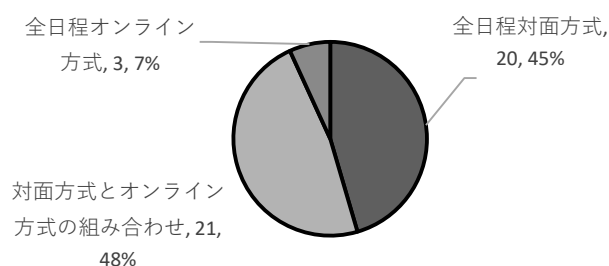


図 2 相談援助演習の望ましい授業方法

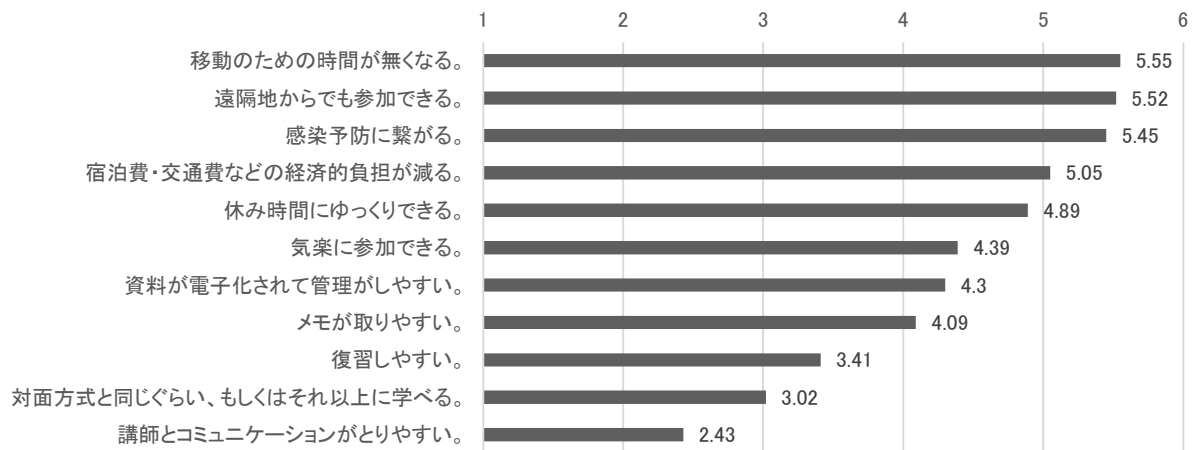


図 3 オンライン方式のメリット

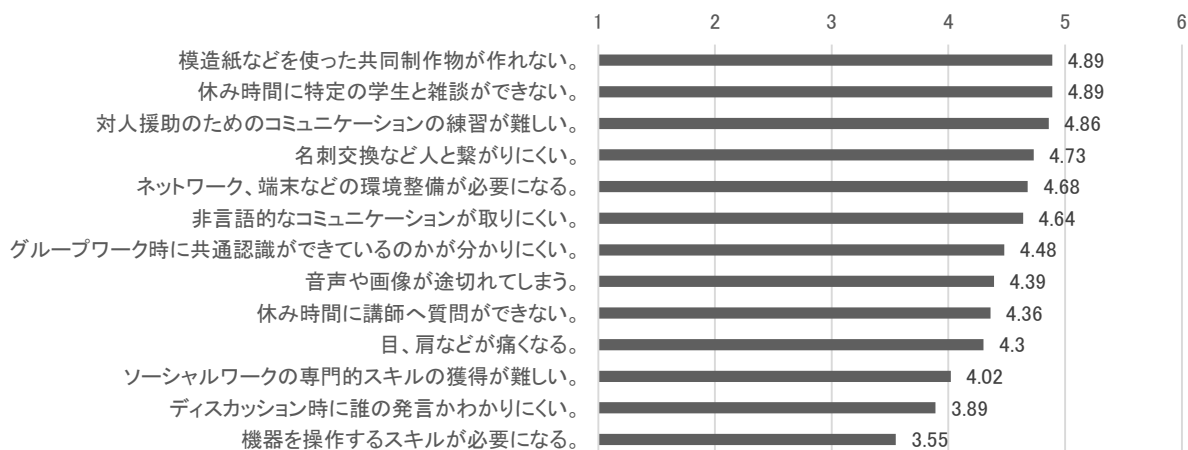


図 4 オンライン方式のデメリット

4.2.2 メリットとデメリット

オンライン方式のメリットとデメリットについては 6 件法のリッカート法で質問し、「かなりそう思わない」を 1 とし、「かなりそう思う」を 6 とするダミー変数化を行い、各質問項目の平均値を算出した。その結果を平均値が高い順にして示したのが図 3 と図 4 である。

メリットで最も高かったのは「移動のための時間が無くなる」(5.55)、次いで「遠隔地からでも参加できる」(5.52)、「感染予防に繋がる」(5.45)であった。

それに対してデメリットとしては「模造紙などを使った共同制作物が作れない」(4.99)、「休み時間に特定の学生と雑談ができない」(4.89)、「対人援助のためのコミュニケーションの練習が難しい」(4.86)が高くなっており、何か共同制作物を作ったり、相談援助演習の授業として重要なコミュニケーション面でデメリットを感じていたと言える。

4.2.3 総合評価

メリットとデメリットの回答について、尺度信頼性統計量を計算したところ、クロンバックの α が 0.842 (メ

リット) と 0.864 (デメリット) となっており、0.8 以上あることから妥当な尺度であると判断した (表 3)。その上で、主成分分析を行った。その結果が表 4 である。この主成分については、「移動する時間や費用が不要となり、遠隔地からでも気軽に参加しやすい (参加しやすさ)」と定義した。

表 3 尺度信頼性統計量

メリット			
	平均値	標準偏差	クロンバックの α
尺度	4.37	0.735	0.842
デメリット			
	平均値	標準偏差	クロンバックの α
尺度	4.44	0.767	0.864

次にデメリットに関する質問項目を用いて、主成分分析を行った。その結果が表 5 である。抽出された主成分については、「人とつながり、雑談などコミュニケーションがとりにくく、共通認識ができていないのが分かりにくい。(コミュニケーションが取りにくい)」と定義した。

表 4 主成分分析の結果（メリット）

主成分負荷量	主成分		独自性
	1	2	
遠隔地からでも参加できる。	0.818	-0.48	0.101
移動のための時間が無くなる。	0.754	-0.543	0.138
感染予防に繋がる。	0.741	-0.543	0.156
宿泊費・交通費などの経済的負担が減る。	0.709		0.479
気楽に参加できる。	0.651		0.543
対面方式と同じぐらい、もしくはそれ以上に学べる。	0.628	0.442	0.411
資料が電子化されて管理がしやすい。	0.619		0.565
休み時間にゆっくりできる。	0.586		0.656
メモが取りやすい。	0.588	0.668	0.207
復習しやすい。	0.46	0.537	0.5
講師とコミュニケーションがとりやすい。	0.326	0.394	0.738

注. 「回転なし」の結果です
0.3以上のみ表示

表 5 主成分分析の結果（デメリット）

主成分負荷量	主成分		独自性
	1	2	
名刺交換など人と繋がりにくい。	0.795		0.335
グループワーク時に共通認識ができてい るのが分かりにくい。	0.773		0.315
休み時間に特定の学生と雑談ができな い。	0.771		0.365
非言語的なコミュニケーションが取りに くい。	0.675		0.461
目、肩などが痛くなる。	0.668		0.552
ディスカッション時に誰の発言かわかり にくい。	0.666	-0.331	0.447
ソーシャルワークの専門的スキルの獲得 が難しい。	0.647		0.514
音声や映像が途切れてしまう。	0.646	0.532	0.299
休み時間に講師へ質問ができない。	0.63		0.54
対人援助のためのコミュニケーションの 練習が難しい。	0.627		0.552
模造紙などを使った共同制作物が作れな い。	0.469	-0.319	0.679
機器を操作するスキルが必要になる。		0.812	0.305
ネットワーク、端末などの環境整備が必 要になる。	0.485	0.748	0.206

注. 「回転なし」の結果です
0.3以上のみ表示

表 6 望ましい授業方法別に見た主成分得点（メリット）

正規性検定（シャピロ=ウィルク）		W	p				
主成分得点		0.943	0.031				
注. 小さなp値は正規性の前提が満たされていない可能性を示します							
対応なし検定							
		統計量	自由度	p	平均値 の差	差の 標準誤差	
主成分得点	ウェルチのt	-4.47	30.1	<.001	-1.16	0.26	
	マン=ホイットニーのU	77		<.001	-1.04		
グループ統計量							
		グループ	N	平均値	中央値	標準偏差	標準誤差
主成分得点	対面方式		20	-0.633	-0.458	1.02	0.227
	全部・一部オンライン方式		24	0.527	0.636	0.615	0.125

表 7 望ましい授業方法別に見た主成分得点（デメリット）

正規性検定（シャピロ=ウィルク）		W	p				
主成分得点		0.97	0.301				
注. 小さなp値は正規性の前提が満たされていない可能性を示します							
対応なし検定							
		統計量	自由度	p	平均値 の差	差の 標準誤差	
主成分得点	ウェルチのt	1.37	41.9	0.179	0.404	0.296	
	マン=ホイットニーのU	184		0.193	0.39		
グループ統計量							
		グループ	N	平均値	中央値	標準偏差	標準誤差
主成分得点	対面方式		20	0.221	0.188	0.914	0.204
	全部・一部オンライン方式		24	-0.184	-0.31	1.05	0.214

抽出されたメリット・デメリットの主成分得点を用いて、望ましい授業方法が「対面方式」か「全部・一部オンライン方式」（全日程オンライン方式とオンラインと対面の組み合わせ方式を合わせたグループ）の2つにグループ分けを行い、主成分得点の平均値の比較を行った（独立した2群の比較検定）。その結果、メリットの「参加しやすさ」については、全部・一部オンライン方式が望ましいとするグループが対面方式が望ましいとするグループよりも有意に高かった（表6）。デメリットの「コミュニケーションが取りにくい」については、2つのグループ間には有意な差は見られなかった（表7）。以上から、全部・一部がオンライン方式が望ましいとするグループはメリットを感じているが、一方でデメリットについては望ましい授業方法とは関係無く共通してある程度感じていると言える。

表 8 因子分析の結果（メリット）

因子負荷	因子分析		独自性
	1	2	
遠隔地からでも参加できる。	0.964		0.0417
移動のための時間がなくなる。	0.917		0.1366
感染予防に繋がる。	0.864		0.2465
宿泊費・交通費などの経済的負担が減る。	0.554	0.354	0.568
休み時間にゆっくりできる。	0.367	0.326	0.7592
メモが取りやすい。		0.985	0.0301
復習しやすい。		0.67	0.5459
対面方式と同じぐらい、もしくはそれ以上に学べる。		0.622	0.581
気楽に参加できる。	0.319	0.5	0.6485
資料が電子化されて管理がしやすい。		0.43	0.7322
講師とコミュニケーションがとりやすい。			0.9141

注：「最尤法」で抽出した因子に「バリマックス回転」を適用した結果です

要約			
因子分析	負荷量2乗和	分散説明率 (%)	累積%
1	3.19	29	29
2	2.61	23.7	52.7

4.3 オンライン方式を支持する因子

4.3.1 意見の潜在意識（因子分析）

オンライン方式（対面との併用を含む）を支持する因子を探索するために、メリット及びデメリットについてそれぞれ因子分析を行った。その結果が表 8 と表 9 である。メリットの因子 1 については「遠隔地からでも移動せずに参加できる」、因子 2 については「学びやすい」と定義した。

次にデメリットの因子 1 については「コミュニケーションが取りにくい」、因子 2 については「ICT 機器等の環境整備が必要」と定義した。

4.3.2 オンライン方式を支持する因子

因子分析の結果から抽出された 4 つの因子を規定変数とし、一部もしくは全部をオンライン方式で受講することが望ましいという意見を従属変数として、2 項ロジスティック回帰分析を行った。その結果が表 10 である。

その結果を踏まえて、メリット及びデメリットの因子と望ましいとする授業方法の関係性を示したのが図 5 である。移動せずに参加できたり、メモが取りやすく復習しやすいと感じられると、一部もしくは全部に

表 9 因子分析の結果（デメリット）

因子負荷	因子分析		独自性
	1	2	
グループワーク時に共通認識ができていないのが分かりにくい。	0.835		0.295
休み時間に特定の学生と雑談ができない。	0.723		0.424
ディスカッション時に誰の発言かわかりにくい。	0.682		0.533
ソーシャルワークの専門的スキルの獲得が難しい。	0.68		0.538
対人援助のためのコミュニケーションの練習が難しい。	0.645		0.582
名刺交換など人と繋がりにくい。	0.614	0.494	0.379
休み時間に講師へ質問ができない。	0.562		0.664
目、肩などが痛くなる。	0.52	0.301	0.639
模造紙などを使った共同制作物が作れない。	0.438		0.808
ネットワーク、端末などの環境整備が必要になる。		0.907	0.171
音声や映像が途切れてしまう。	0.346	0.7	0.39
機器を操作するスキルが必要になる。		0.685	0.502
非言語的なコミュニケーションが取りにくい。	0.47	0.49	0.539

注：「最尤法」で抽出した因子に「バリマックス回転」を適用した結果です

要約			
因子分析	負荷量2乗和	分散説明率 (%)	累積%
1	4.09	31.5	31.5
2	2.44	18.8	50.3

表 10 2 項ロジスティック回帰分析の結果

予測変数	推定値	標準誤差	Z	p	オッズ比	95%信頼区間	
						下限	上限
切片	0.114	0.397	0.288	0.773	1.121	0.515	2.44
因子得点 メリット1 遠隔地からでも移動せずに参加できる	1.434	0.678	2.115	0.034	4.197	1.111	15.86
因子得点 メリット2 学びやすい	1.042	0.433	2.408	0.016	2.836	1.214	6.62
因子得点 デメリット1 コミュニケーションが取りにくい	-0.529	0.464	-1.138	0.255	0.589	0.237	1.46
因子得点 デメリット2 ICT機器等の環境整備が必要	-0.116	0.456	-0.254	0.799	0.891	0.364	2.18

注：推定値は「method2 = オンライン・対面併用方式」vs. 「method2 = 対面方式」の対数オッズで

モデル	逸脱度	AIC	BIC	R ² マク
1	43.3	53.3	62.2	0.286

オンライン方式を取り入れることが望ましいと考えるようになる。しかし、他の学習者とかと雑談やグループワークができないと感じたり、あるいは ICT 機器等の環境整備が必要な状況にあると、逆に対面方式を望ましいと考えるようになることが明らかとなった。

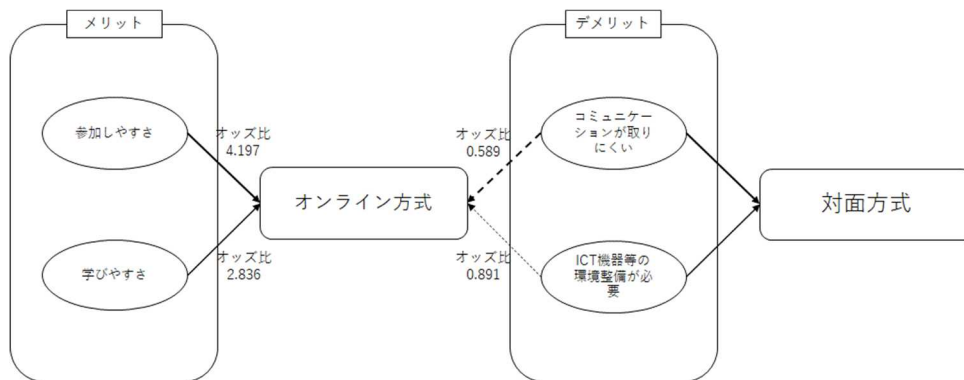


図 5 受講生の感じるメリット・デメリットと望ましい授業方法との関係

5. 考察

今回の調査結果から、相談援助演習で ICT を活用したオンライン方式で行った場合、コミュニケーション面において学習者はデメリットを感じており、コミュニケーション面で充分に取り組めていないと感じと、対面方式を望ましいと考えるようになる。オンライン方式で学ぶためには、この点をカバーする工夫が課題となると考えられる。

これを相談援助演習の教育の目的である「基本的コミュニケーション技術の習得」や「基本的な面接技術の習得」という基本的かつ重要な項目から考えると、充分に教育の目的を達成しているとは言い難い。また 2021 年度からの入学生を対象とした新カリキュラムにおいても、ソーシャルワーク演習（旧 相談援助演習）のねらいとして「ソーシャルワーク実践に必要なコミュニケーション能力を養う」ことが挙げられている点も踏まえると、新カリキュラムにおいても今回明らかとなった課題は今後も存在すると考えられる⁽¹⁰⁾。

これらから、教育の質を担保することができていたのかということに疑問が付くことにもなる。ただし、本稿における調査は対面方式とオンライン方式を両方受講した学習者が感じたメリット・デメリットと感じたことを基にして分析をしており、相談援助演習を受講したことで実際にどのような専門性が身についたかまでは十分に分析したとは言えず、従ってオンライン方式の相談援助演習は対面と同等の教育の質を担保したかどうかについては明らかにすることはできていない。そのためにはループリックを用いて学習者の学びを評価することが、次に必要であると考えられる。

6. 終わりに

今回の調査はサンプルの抽出に偏りがあり、必ずしも一般化できる結果ではない。またメリットとデメリットを尋ねる質問方式であり、ループリックを活用した学習者の学びの評価を行うことまでには至っていない。これらについては、今後の研究課題である。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 19K02977 の助成を受けたものである。

参考文献

- (1) 大山博幸, 北原俊一, 丸山晃, 新行内康慈, 中尾茂子, 安達一寿: “ICT を活用した福祉領域の学外実習におけるリフレクション支援と評価”, 日本教育工学会論文誌, Vol.34, pp.29-32 (2010)
- (2) 坂本毅啓, 佐藤貴之: “スマートフォンによるコミュニケーションスキル獲得を目指した教材の開発—社会福祉士養成教育における模擬面接の活用とその学習効果”, 教育システム情報学会研究報告, Vol.29, No.4, pp.49-54
- (3) 東京福祉専門学校: “社会福祉士取得を目指す社会人に対する, e ラーニング活用による学びの質向上に資するプログラム開発事業 成果報告書”, 東京, (2019)
- (4) 日本ソーシャルワーカー教育学校連盟: “「新たな社会福祉士養成カリキュラムにおける教員研修のあり方に関する調査研究事業 厚生労働省令和二年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社会福祉推進事業 報告書”, 日本教育ソーシャルワーク教育学校連盟, (2021)
- (5) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟: “「感染症の拡大や災害発生時における, 持続的な社会福祉士養成教育の

在り方に関する調査研究事業」実施報告書 厚生労働省
令和三年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金社
会福祉推進事業 報告書”，日本ソーシャルワーク教育
学校連盟, (2022)

- (6) 保正友子: “ICT を使用したソーシャルワーク教育の現
状と課題”，2021 年度日本社会福祉教育学会第 17 回大
会発表抄録集, pp.21-22 (2021)
- (7) 畑香里, 鬼塚香, 住友雄資: “2020 年度教育実践報告:
「精神保健福祉援助実習指導」・「精神保健福祉援助実習」
ーコロナ禍における教育実践と今後の課題ー”，福岡県
立大学人間社会学部紀要, Vol.30, No.1, pp.181-190
(2021)
- (8) 河谷はるみ, 平直子, 井手順子, 田中康雄, 田原亮司,
孔英珠, 穴井あけみ; “オンライン授業 (Moodle) にお
けるソーシャルワーク実習指導”，西南学院大学 人間
科学論集, Vol.16, No.2, pp.81-116 (2021)
- (9) 一般社団法人日本社会福祉士養成校協会編: “相談援助
演習 教員テキスト 第 2 版”，中央法規, 東京(2015)
- (10) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟編: “最新社会福祉
士養成講座・精神保健福祉士養成講座 13 ソーシャル
ワーク演習”，中央法規, 東京, (2021)